カラダを取り合うということ

亀山佳明
龍谷大学社会学部教授

先日，人類学者の黒田末寿さんと会って話をする機会があった。彼はピグミーチンパンジーの研究で著名であるが，またフィールドワークの達人でもある。学生時代からチンパンジーを追いかけてアフリカのジャングルを歩き回ってきたからである。彼との雑談の中で教育をめぐる興味深い話を聞いた。フィールドワークの専門家は学生を野に連れ出す必要があるというのだ。といって，何もアフリカのジャングルに連れて行くわけではない。大学の近くにある，今では本当に物珍しい職業となってしまった鍛冶屋さんに引き連れて行くというのである。何をするかというと，そこの親父さんの作業を手伝わせてもらうのである。むろん，危険のない単純な作業に限られるのだが，ある時こういうことがあった。

その日は親父さんがごぼうを掘るというので，それを手伝わせてもらうことになった。畑に着いていざ掘ろうというのに，学生たちはボーと突っ立っている。黒田さんは見かねて，何でもよいから手伝える作業を見つけ出して手伝うように指示を与えた。すると，彼らはどうしてよいのやらわからず，戸惑うばかりであった。彼らにしてみると，ごぼう掘りなどという作業は見たことも聞いたこともない作業である。ましてや相手と間合いをとりながら，共同作業するなどということはとうてい無理なことだ。ところが何度か手伝っているうちに，学生たちの態度に変化が生じてくる。まず，作業の進行が理解できなかった彼らが，次に要求される動作を次第に読み取れるようになって，それに備えることができるようになる。それにつれて彼らの態度に固さがなくなり，作業がスムーズに流れ出す。ごぼう掘りという作業は農作業をやりつけたものにとっても，容易な作業とはいえない。彼らはおぼつかない腰つきながら一所懸命になってくるという。黒

田さんは講義や講読という教室での教育よりも，このような作業を通しての教育を重視しているという。現場に出かけ，カラダを使って他者と共同しながら，現実を変えていくという作業こそが，彼らにもっとも必要だと思われるからである。

この話をききながら，私にも納得できることが少なからずあった。というのは，私は自分のゼミのことを思い合わせていたからである。私の担当している専門課程のゼミは，3回生25人，4回生25人，合わせて50人が在籍しており，それぞれを半分にして，合同させ，都合2クラスにしている。さらに，理論コースに所属しているために，社会調査を含めたフィールドワークとは縁の薄いゼミでもある。そのために，学生たちをフィールドに連れ出すことは困難であるだけでなく，第一，私自身にフィールドワークを指導する能力が欠けている。ところがそんなゼミでありながら，私は彼らにカラダを使わせることを目標の一つにしているのだ。だからこそ，黒田さんの指摘に同意することが多かったのである。それではどのようにしてカラダを使わせているというのか。

ゼミ恒例の行事の一つに5月の3回生歓迎スポーツ大会がある。といっても，大層なものではなく，天候が良ければソフトボールを，雨であれば体育館でバスケットボールを，皆でプレイして遊ぶというものだ。要は，皆でカラダを使いながら半日かけて遊ぶことである。ソフトボールを例にとってみよう。男女混成の5チーム，大学院生1チーム，むろん私も参加するのだが，計6チームを作って，総当たりのリーグ戦を行う。なぜ全員が参加して行わなければならないのか，なぜスポーツでなくてはならないのか，また，どうしてそうした行事を恒例化する必要があるのか，疑問に思われる向きも多いかと思う。こうした当然ながらの疑問に，私は自分の研究テーマである身体の問題から答えていくことにしよう。

簡単に言うなら，互いが互いのカラダを取り合うためである。さらに付け加えるならば，カラダの取り合いこそがコミュニケーション（共感）の根本であるからだ，と言おう。このことを以下において説明しなければならないのであるが，少し理屈っぽくなることをお許しいただきたい。今，2人の人物がソフトボールを使って，キャッチボールをしている情景を思い描いてほしい。一方がボールを投げる役を，そして他方がそれを受ける役を引きうけ，つぎには役割が

逆転し，それが交互に繰り返される。投げる側は相手を良く見て，どのあたりにどのくらいのスピードの球を投げるか調整する。受ける側も相手の投げる様子を観察しながら，それに合わせて受ける態勢を作っていくはずである。大切なことは，自分が作り出している態勢は，相手の態勢に合わせながら行われていることである。

このような関係を分かりやすくするために，一つの比喩を使ってみよう。それは凹凸という喩えである。この二つの図はあわせると，ぴったりと互いにはまってしまう。球を受ける側を凹とすると，投げる側は凸ということになる。問題はこの両方の動作が同一の側においてなされるということである。受ける動作（凹）を作り出すためには，投げる動作（凸）が必要とされる。というのは，凸にあわせて凹が生み出されなければならないからである。一人の人物が二つの動作を作り出せないと，キャッチボールはできないということである。といって，われわれは同時に二つの動作を作り出せるわけでもない。ならば，どうするか。一方を潜在化させ，それに合わせて他方を顕在化させる以外にはない。受ける動作（凹）をなす前に，われわれは相手の行う投げるという動作（凸）をなぞり，それを自分の内に作り出すのであるが，この凸は実際には表現しないで潜在化させる。そして，その潜在化された凸に合うような動作，つまり凹という動作を作り出す。このような凸と凹が重なるとき，始めてわれわれにキャッチボールが可能になるというわけだ。

ついでに言うと，上手，下手はどのようになるのか。一つは凹凸間における間合いの取り方にあるが，間髪をいれずに凸（潜在化）凹（顕在化）ができるかどうかにかかっている。もう一つには，相手の動作のなぞりが精確に，また滑らかにできるかどうかにかかってくる。いずれにしても，日常の生活の中でわれわれは絶えずこのような凹凸を繰り返しているのであるが，スポーツや作業では動作における相互のかみ合いが顕著に要求される。このような動作のかみ合いをここでは「カラダを取り合う」と呼んでおこう。

ここからまた不器用という問題の説明もできることになる。先の上手の逆になると考えれば良いからである。凹と凸のかみ合いのリズムが悪いこと，相手の動作のなぞりが不精確であるばかりか，それが滑らかに反復せず，したがって顕在化されるはずの自己の動作にも精確さと滑らかさに欠けること，とりあえずはこ

のように要約できるはずである。これと関連して病的な不器用さについても触れておきたい。以前に読んだ分裂病者の事例にこのような説明があてはまるケースがあった。その病院では一種のレクリエーション療法が取り入れられていた。あるとき，看護婦さんの呼びかけで，病院の中庭でドッジボールの投げ合いをすることになった。十人ばかりの患者さんに何人かの看護婦さんが加わり，輪になってボールの投げ合いをしようとした。互いに向き合った人にボールを投げるというのがルールであった。われわれにすれば何でもない，容易な動作に思われるのであるが，分裂病の人にはきわめて困難な動作となる。彼らは投げられたボールが眼前にきたときに手を出そうとするために，間に合わず，ボールが顔面を直撃することになる。このような不器用さは，先の言い方にならえば次のように解釈される。彼らは相手の動作を潜在的になぞることができないので，それに合わせて必要な動作を顕在化させることができない。つまり，互いが互いのカラダを取り合うことができないのである。その原因はどこにあるのかは分からないが，カラダが取り合えないことと彼らのコミュニケーションの障害とは関連していると思われる。

黒田さんや私が学生たちに作業やスポーツをさせるのは，彼らにコミュニケーションの不器用さを看て取るからである。もちろん，彼らと分裂病の患者を同一視するつもりはないが，どこかで通底する不器用さを感じることも確かである。それは彼らが互いのカラダの取り合いが上手でないことに由来すると思われる。おそらく，黒田さんもこのようなことを感じているからこそ，彼らを作業場に連れて行くのであろう。コミュニケーションを取ろうとする相手との間で，まず互いにカラダを取り合うことができること，ここから始めないことには，ゼミが成り立たないのである。

（かめやまよしあき　文化社会学・
コミュニケーション論専攻）